

「スポーツイベントを通しての地域活性化」



鳥取大学地域学部
兵庫県立村岡高等学校

目 次

I	刊行にあたって	2
II	地域探求活動報告	
	1. 序論	3
	2. 地域探求 I	3
	3. 地域探求 II	6
	4. 地域探求 III	9
	5. 展望	13
	6. 感想	14
	7. おわりに	18
III	自然環境を活用した	
	スポーツによる地域活性化の検討	19
IV	附録	25
	資料 1. アンケート用紙	
	資料 2. アンケート結果	
	資料 3. みかた残酷マラソン提言書	

地域探求活動報告

兵庫県立村岡高等学校地域創造類型

1.序論

兵庫県立村岡高等学校地域創造類型¹では、学校設定教科「地域探求」を通して、地域づくりに積極的に関わる態度と、課題解決に向けての取り組む方法や、チームの中で自ら考え、提案し合う姿勢や技能を学習している。「地域探求」には、「地域探求Ⅰ」「地域探求Ⅱ」「地域探求Ⅲ」があり、一年次から三年次にかけて、それぞれで履修されている。一年次の「地域探求Ⅰ」では、地域の資源と人材を教材として学んできた。地域人材による講義やフィールドワークを通して、普段見慣れた地域とは異なる視点で見つめ直し、地域の様々な特徴を知ることがテーマになっている。「地域探求Ⅱ」では、地域を深めるために、「地域スポーツイベント」を対象に、フィールド調査を行い、その結果をまとめた。他にも、島根県隠岐郡海士町に研修合宿として行き、地域づくりの先行事例を実際に見聞きし、体験することも行っている。「地域探求Ⅲ」では、「地域探求Ⅱ」で取り組んできた地域課題を解決するために、チームで取り組んできた企画を実践に移し、地域にこれまでになかったモノを創りあげていく。

本論では、地域創造類型2期生が、「スポーツイベントを通しての地域活性」をテーマに「地域探求Ⅱ」から取り組んできた活動内容を報告するため、ここではもう少し「地域探求Ⅰ」での各学習活動について振り返り、最後に地域が抱える課題について言及する。

2.地域探求Ⅰ

「地域探求Ⅰ」では、「地域を知る」をテーマに、香美町の自然や文化、歴史について学んできた。まず、自然では山・川・海の三つに重点を置き、それぞれの分野の専門家から講義を受けるだけでなく、実際の現場に出かけ体験を通じた学びが得られた。文化、歴史については、村岡の歴史や、それが日本史とどのような関係にあるのか、また村岡周辺にある古墳などについて歴史専門家から解説を受けながら見学した。

2-1 地域の「山」について学ぶ

「山」では、【但馬の植生】と【獣被害と対策】について学習した。【但馬の植生】では、村岡にある銚子ヶ谷湿原に赴き、カキツバタという兵庫県指定の天然記念物であり準絶滅危惧種である花の植生を調査した。カキツバタは、アヤメ科の多年草で五～六月にかけて紫色の花を咲かせ、特徴は中央部に淡黄色の斑紋があることだ。このような貴重な花が後世まで残ってほしいと思う。しかし、現在の銚子ヶ谷湿原のカキツバタ群落はまだ兵庫県指定の天然記念物・準絶滅危惧種であり国の指定を受けていない。そのため、国の指定を受けるべく学術調査が進められている。

¹ 2014年4月より通学区域を定めない「地域アウトドアスポーツ類型」に改編し、地域創造系とアウトドアスポーツ系が設置された。

【獣被害と対策】では、兵庫県に生息するツキノワグマについて学んだ。ツキノワグマとほかの熊との違いは、首もとにある白い月のような模様があるかないかである。その他は、ツキノワグマも他の熊と同じように、聴覚と嗅覚がとてもよいけれども、視覚はあまりよくないということであった。また、ツキノワグマは普段は用心深く臆病な性格でもある。だから、登山で鈴のような高い音を響かせることで、熊が怖がり、熊との遭遇を避けることができる。しかし、川など水の音がする場所では、こうした熊除けの音が熊に届かないこともあるので、注意しなければならない。

本来は人を嫌うツキノワグマが、最近様々な問題を起こしているようだ。山から人里まで下りてきて、農作物の被害・家畜の被害・器物の損壊・人身被害などの問題を起こしている。こうした被害の対策として、人間は、誘引物の除去（庭にある果樹などの切り倒し・食べ物を外に放置しないなど）・環境整備（柵の設置・罠の設置など）・防護・注意などの対策をすることで、熊被害を少なくしようとしている。

ツキノワグマが人里にまで下りてくる原因の一つには、人間が森に入り、木を切ったりすることで、ツキノワグマの住みにくい森にしているということが挙げられている。本当のことを言えば、ツキノワグマの方が被害を受けてしまって、人里に下りて人間に被害を与えてしまうのだ。

人里に現れた熊は、最初は特に何もされないが、人里に現れることを繰り返すにつれ、人間によって追い払いや学習放獣などが行われる。それでも繰り返し人里に現れる熊は捕殺されてしまう。人里に熊がいる状況だと、人間は安心して生活できない。しかし、人間社会の発達により住む環境を失くした熊が、仕方なく人里に下りてきて最終的に殺されてしまうというのは、おかしなことではないだろうか。互いの生活環境をわきまえ、守っていくことが大切であると考えた。もちろんこうした配慮は、熊だけに限らず、他の生物に対しても同じ事が言える。

2-2 地域の「川」について学ぶ

「川」では、【水生昆虫調査】を通して、川に住む昆虫の生態を学び、村岡を流れる昆陽川と湯舟川で、採集調査を行った。この時の調査は、地域の小学生と一緒に川に入り、川に生息する昆虫を採集した。なお、川で捕まえた昆虫は、その後学校に持ち帰り、生物教室で捕まえた水生昆虫の仲間分けをして昆虫の標本作製した。

水生昆虫が生息する場所や体のつくりから、昆虫が住む川の水質がわかる。つまり、昆虫を採集すれば、その川がきれいかどうか知ることが出来るのである。具体的には、水質がきれいな川にはヒゲナガカワトビケラ、ヘビトンボなどが生息する。一方、水質があまりよくない川にはヒメカゲロウ、カワニナなどがいることを学習した。そして、昆陽川、湯舟川のどちらの川でもカゲロウやトビケラなど多くの種類の水生昆虫が生息しており、地域の川の水質がきれいであることが分かった。

水生昆虫調査を通して、川についてわかった事が他にもある。それは、(1)水温・水質によって水生昆虫の生態が違うこと(2)湯舟川より昆陽川は比較的冷たく、この冷たさは、冬でもあまり変わらないこと(3)川にはたくさんの水生昆虫がいて様々な種類が

いること(4)生物が住みやすい環境とは人が住みやすい環境であることということ。こうした地域の多様な種の水生生物を守るために、水質汚染から川を守るべきであると強く感じた。

2-3 地域の「海」について学ぶ

「海」では【海生生物調査】をするために、竹野スノーケルセンター²に行き、スノーケリングをした。私たちは、スノーケリングは初めてで、泳ぎも不得意だったので不安だったが、ウェットスーツを着ると案外大丈夫だった。海の中はクロダイなどの魚類、ウニ・藻なども見ることができた。そしてスノーケリング後の講義では、但馬には珍しい生物（ミノカサゴなど）が数多く生息していること・ゴミが海岸に流れ着くことなどの話を聞き、自分たちの行動一つで環境は大きく変化し、改善できることを学んだ。

2-4 自然と人との関わり

地域探求 I では、「山」「川」「海」の3つについて学び、どの自然もすべて繋がっていることを学習した。山が雨水を溜め、その水が川として海に流れ着き、海の水が蒸発して雨となる。このサイクルが絶えず続いてきて、今の自然界の多くの生態系を形成していると言っても過言では無い。そしてこのサイクルの三要素のすべてに関与しているのが私たち人間だ。自然界のサイクルというのは、とても影響を受けやすいもので一つが途切れてしまえば、そこで全体のバランスが崩れていってしまう。人間の勝手な行動で自然破壊を行えば、自然のバランスが崩れてしまい、自然から多くの恩恵を受けている人間社会にとっては大きな影響が出てしまう。だから、人間と自然との関係は、一方だけが利益を得る関係ではなく、互いに利益が出るような相利共生の関係が望ましい。人間にとって自然が必要なことと同じように、豊かな自然を保ち続けていくためには人間が必要で、人と自然は切っても切り離せない関係にあるということを改めて実感した。

2-5 但馬の歴史

文化・歴史については、兵庫県豊岡市日高町にある国分寺資料館³と村岡にある歴史的建造物・古墳を調査しながら学習した。国分寺資料館では、その当時の人々の暮らしについてのことが展覧されていた。村岡にある文堂古墳は洞窟のような造りがありその中に入れるようになっている。中は少々狭く、長細い円柱の形だ。明らかに人より大きな岩で造られていて、当時の技術でどのように造ったのか不思議だった。

文化・歴史を学び、現代の生活がよくわかった。

2-6 地域が抱える問題について

現在、マラソンブームにより日本各地でマラソン大会が開催されているが、香美町に

²山陰海岸国立公園の自然情報提供と、自然とふれあえる施設として、平成4年に整備された。

³兵庫県豊岡市には、天平13年(741)に聖武天皇が建てさせた但馬国分寺や、延暦23年(804)に移転をした但馬国府跡(衾布ヶ森遺跡)など、但馬の中でも多くの歴史遺産が眠る地域として知られている。(「但馬国府・国分寺館HP」：<http://www3.city.toyooka.lg.jp> より引用)

も特徴的な自然を活かしたコースをもつマラソン大会が香住区、小代区、村岡区で毎年一度開催されている。ランナーの参加者数は増加傾向で、予定していた募集締め切りより前に、参加定員数に達している。香美町で開催されるマラソン大会もランナーを引き寄せる地域スポーツイベントとなっている。これらの地域スポーツイベントは、運営委員だけでなく、地域住民も運営スタッフとして参加し、イベントを支えている。

地域探求の時間に地域について学んできて、自然保護でもイベントの開催でも計画を考案し実行していくのは、人である点が共通していた。場所やお金がそろっていても実行する人がいなければ、何も変わらない。人の力こそが地域振興の力となる。

しかし、香美町の高齢化が進み、平成24年の町の調査では約33%の高齢化率となり、全国水準の約23%（平成23年10月1日内閣府）より、高くなっている。このような地域の高齢化と同時に、地域の人口減少は進んでいき、これが地域スポーツイベントを支える人口の減少にもつながって、将来、香美町で現在あるスポーツイベントそのものが、継続して開催されなくなってしまうかねない。

このような人口減少、高齢化問題は、香美町で続けられてきた地域スポーツイベントにも影響を与えていることがわかる。

3.地域探求Ⅱ ～地域を深める～[二年次]

3-1 村岡高校と地域スポーツイベントとの関わり

「スポーツイベントを通しての地域活性化」という大きなテーマをもとに、(1)「スポーツ観光と地域活性」(2)「健康づくりと地域活性」について考えた。

香美町内には兵庫県雪合戦大会、ハチ北アルペンスキー大会、みかた残酷マラソン、ダブルフルウルトラランニング、但馬牛ゆったりウォークなど沢山のスポーツイベントがある。

まず(1)のテーマについて、2013年6月9日に行われた「みかた残酷マラソン」、2013年9月29日に行われた「村岡ダブルフルウルトラランニング」でランナーに対してアンケート調査を行った。

次に(2)のテーマについて、2013年5月25日に行われた「蘇武ヶ岳町民ハイキング」では聞き取り調査を行い、2013年11月3日に行われた「但馬牛ゆったりウォーク」ではアンケート調査を行った。これらのアンケートは大会をより良くすることを目的に行った。アンケートは全て参加者の方々に直接声を掛け、その場でアンケートに答えてもらった。



図1 アンケート協力の呼びかけ



図2 アンケート聞き取り

3-2 調査活動の概要

今回のアンケートで用意した質問項目は、ランナーの性別、年齢、居住地や残酷マラ

ソンの参加回数その他、大会の良い点、改善すべき点などの大会運営に関する点についても聞き取った⁴。回収できたアンケート数は、「みかた残酷マラソン」では 1020 名分、「村岡ダブルフルウルトラランニング」では 845 名分、「但馬牛ゆったりウォーク」では 214 名分であった。

2013 年 12 月以降は、「みかた残酷マラソン」、「村岡ダブルフルウルトラランニング」、「但馬牛ゆったりウォーク」の 3 つの担当に分かれて、アンケートの分析を行った。アンケートの結果をまとめ、それぞれの担当グループ内で良い点や改善点などについて話し合った。



図 3 アンケートの集計・分析

3-3 調査活動の実践①「みかた残酷マラソン」

(1) アンケート分析から見えた良い点

みかた残酷マラソンの良い点についてアンケート調査をした結果を表 1 にまとめた。「ボランティア」という項目が、どの年代の参加者からも一番多く選ばれ、次には景色、コース、食べ物などが選ばれた。また、「ハイタッチ」が良かったという年代は、29 歳以下に目立って多く、6 割近くのランナーに「ハイタッチ」が良い点として選ばれた。

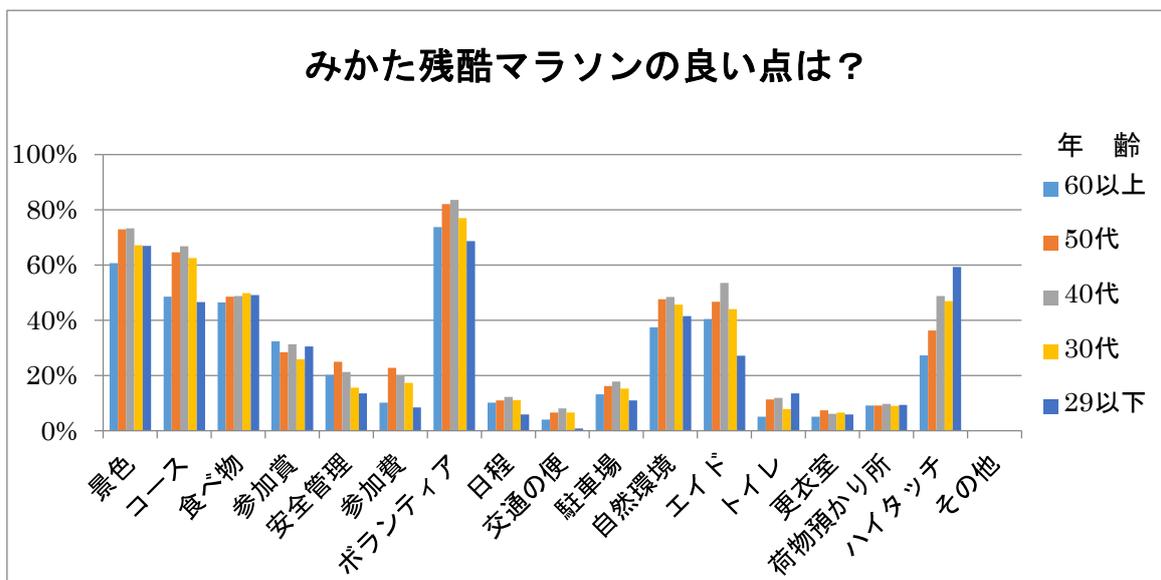


表 1 「みかた残酷マラソン」アンケートの集計結果

(2) アンケート分析から見えた改善点

良い点として選ばれなかった項目として、「交通の便」や「更衣室」「トイレ」「荷物預かり所」などが挙げられる。

また参加者だけでなく、スタッフにもアンケートに答えてもらった結果、紙コップの不足、給水のスペースの狭さ、雨を避ける所の確保の他にも、一部への生徒への負担

⁴ 使用したアンケート用紙は「8. 附録」資料 1 を参照

が大きいこと、全生徒で片付けを行うことなどが挙げられてあった。

(3) アンケート分析をして感じたこと

アンケート結果からリピーター率が7割程度であることが分かった。リピーター率は高いが、新規参加人数を増やせていない状況なので、それが課題である。考えられる課題は、PR不足にあると思う。PR不足解消のために、みかた残酷マラソンの魅力を多くの人に紹介できる冊子を村岡高校地域創造類型で作成している。高校生の笑顔、地域の方々の笑顔、面白企画などを一つの冊子にして、より「みかた残酷マラソン」を知っていただけたらよいと思っている。

3-4 調査活動の実践②「村岡ダブルフルウルトラランニング」

(1) アンケート分析から見えた良い点

村岡ダブルフルウルトラランニングの良い点をまとめたグラフが表2である。「景色」や「自然環境」、「エイド」、「食べ物」、「ボランティア」、「高校生スタッフ」がよく選ばれた項目として挙げられる。

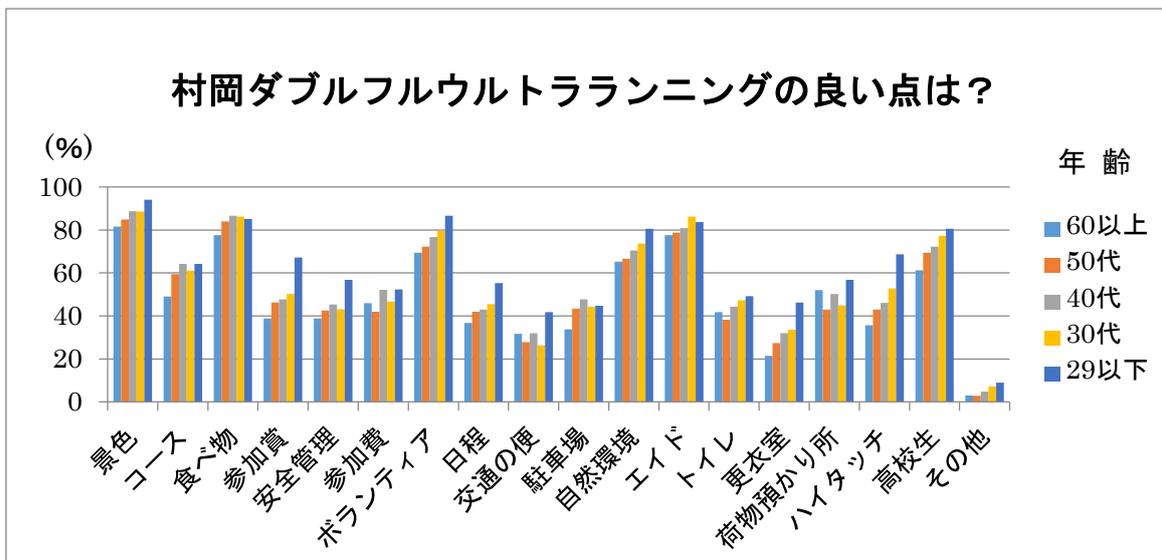


表2 「村岡ダブルフルウルトラランニング」アンケートの集計結果

(2) アンケート分析から見えた改善点

改善点として、トイレの数が少ないことや、緊急時の対応があまり良くなかったこと、エイドの食べ物が少ないことなどの運営面のことが多くあげられた。運営面以外では、交通の便が悪いということがあげられた。

(3) アンケート分析を通して

アンケートの分析をして、良い点がある半面、改善点も多く見つかった。良い点では、景色や自然環境といった香美町の誇りである豊かな自然が評価された。また高校生がスタッフとして活動していることも評価された。高校生の活動で、ランナーに喜んでもらうことができ、やりがいを感じた。

改善点では、「トイレの数を増やす」「緊急時の対応」「交通の便」など運営面に関す

ることがあがったが、これらの課題については高校生の力だけで解決していくのは難しい。改善するために新たに費用がかかるような課題は、実行委員会にアンケート結果を報告し、それら以外の自分たちに出来る改善案を考え、率先して活動していきたい。また改めて大会やイベントを運営することの難しさを感じた。

3-5 調査活動の実践③「但馬牛ゆったりウォーク」

(1) アンケート分析から見えた良い点

「但馬牛ゆったりウォーク」では 214 名分のアンケートを回収した。良い点として、「景色」や「自然環境」が選ばれた。

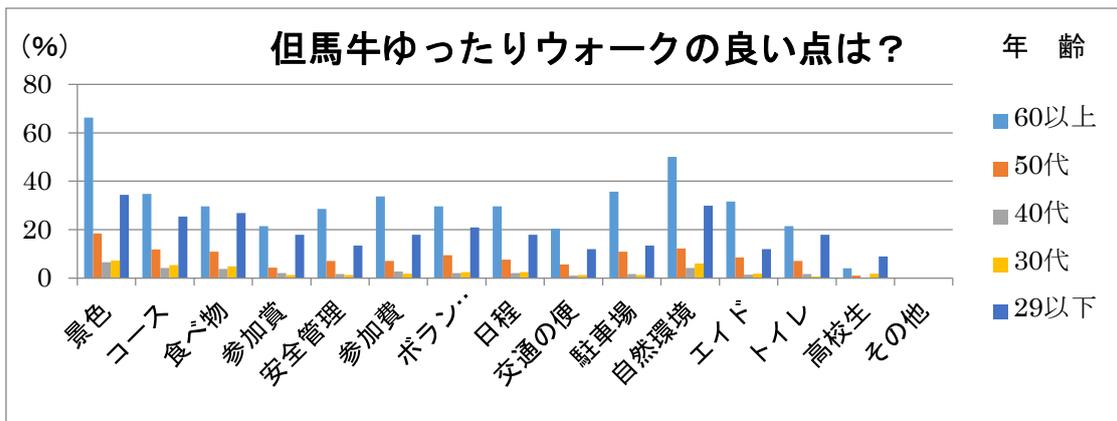


表3 「但馬牛ゆったりウォーク」アンケートの集計結果

(2) アンケート分析から見えた改善点

アンケート結果に、受付の対応への不満の声があった。それは、係員全員に、大会の流れや受付場所の徹底がなされていないため、どこに行ってもいか右往左往したという参加者からの声だった。

(3) アンケート分析をして感じたこと

分析結果から、中高年（40代～60代）の参加が7割であること。また県外からの参加人数が少なく、知名度も低いことがわかった。マラソンとは違った魅力をさらに県外にPRしていく必要があると感じた。

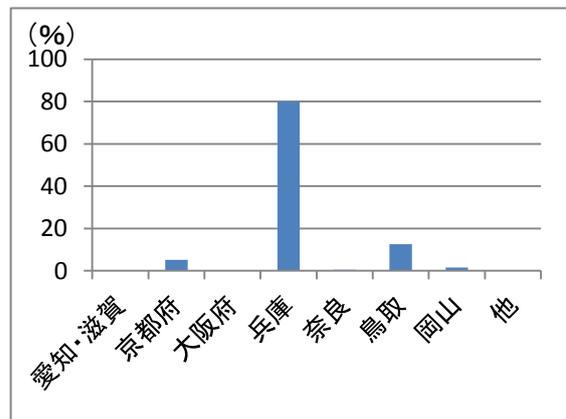


表4 参加者の居住地

4.地域探求Ⅲ ～地域を創る～[三年次]

4-1 提言とその内容

3年次では、地域に積極的に関わり、地域をよりよくする活動を行う。この年の地域創造類型のテーマは「地域スポーツでの地域活性化」であった。2年次で実施したアンケート調査で得られたデータを踏まえ、翌年2014年6月8日に開催された「みかた残

酷マラソン」で高校生が考えた新しい企画を実行委員会に提言した。

(1)アンケート結果やランナーの声から私たち高校生が考えた企画案

1. コース途中の最も困難な箇所に給水所を新設する。
2. 子供たちの遊び場をつくる。
3. 荒地になっているところを開拓して、花を植えてみる。
4. 本部で、マラソンのライブ中継。
5. ランナー同士やランナーと高校生とが交流できる広場をゴール会場につくる。

(2)企画案の整理・分析

高校生企画案を大会実行委員長に発表したところ次のような質問を受けた。(1)企画を実行するための予算の捻出方法はどうか、(2)それらの企画が本当にランナーに対して最高のおもてなしになるのかどうか、など。そこで高校生が出来て、参加者に喜ばれ、自分たちも楽しめる企画案を整理し直した。企画を整理し直す際に、高校生がしたいこと、高校生が実際にできること、(地域から)求められていること、が重なったことをすることを気をつけた。そして再度高校生同士で討論し、高校生ができる企画を提案し、以下の5つの企画が実行委員会に採用された。

1つ目は、もっとランナーと交流がしたいという高校生の意見から、スタート応援の充実として、ランナーとハイタッチをして送り出したり、南中ソーランを披露したり、吹奏楽部の演奏などを行った。「スタートの応援のおかげでパワーが出ました」と言ってもらえた。



図4 【企画1】スタート応援の充実

2つ目が、「コミュニティ広場」。これは、「ランナーとランナーの交流をもっとしたい」というアンケート結果から、ゴール付近に40脚ほどの椅子を置き、コミュニケーションをとるためのスペースを確保したもの。完走されたランナーの方同士健闘をたたえあったり、ランナーとランナーの付き添いの方とのコミュニケーションの場であったり、アイシングをしたり、高校生とアンケート調査を通じて交流したりと、幅広く使っていた。



図5 【企画2】コミュニティ広場の新設

3つ目は「高校生臨時給水所」。これは、ランナーの方から一番大変なエリア（貫田）に給水所を設置してほしいという要望があり、高校生だけで給水所を行うというプランが実現した。高校生臨時給水所はランナーの方々にとても好評だった。またこの、高校生臨時給水所での応援演舞として、村岡高校生有志による南中ソーランや木遣太鼓を披露し、ランナーの方々を熱くすることが出来た。



図6 【企画3】高校生臨時給水所

4つ目が、「なまえ応援隊」。これはもっとランナーの方々を応援したいという高校生の意見から出た企画。普通にランナーを応援するのではなく、「〇〇さん、頑張ってください」と直接名前を呼んで応援するというもの。これはゼッケン番号を、入力したタブレットPCにランナーの方のゼッケン番号を打ち込むとランナーの名前が出てくるという方法を使った。少しでもランナーの方の力になってくれればよいと思い実行した。このプランも好評で、「まさか自分の名前を呼んで応援してくれるとは思わなかった」と、多くのランナーの心に響いたプランだった。



図7 【企画4】なまえ応援隊

5つ目が、「観光地めぐり」。これはみかた残酷マラソンが行われる兵庫県美方郡香美町小代区にある、日本の棚田百選の、「うへ山」にバスで向かい景色を楽しんでもらおうという企画。対象はランナーの付き添いの方。ランナーの方の帰りを待っている間に、もっと地元を知ってもらおうと思い、考え出した企画。このツアーでは、高校生2人がガイドとして棚田の魅力を語った。ツアーに参加された方に大変好評で、「小代にはこんなに素敵なおところがあるんだね」と言っていた。



図8 【企画5】古里観光地めぐり

4-2 実践とその内容と検証と考察

まず企画1の「スタート応援の充実」では、ハイタッチをした。ランナーの皆さんは、「私たち高校生がハイタッチのために手を出しているから、仕方なしにハイタッチをしてくれる」というより、ハイタッチを求めて私たちのところに来てくださり、「ありがとう。頑張ります。」と笑顔で言って下さった。ランナーの皆さんの笑顔を近くで見られた。また、応援する側の自分も元気をもらうことができた。ランナーの方々と直接触れ合うことができた。

企画2の「コミュニティ広場の新設」では、コミュニティ広場にランナーの方々が座って交流が出来るように椅子を設置したが、最初はあまり座る人がいなかった。完走T

シャツ、完走賞、そうめんや冷やしトマトなどの屋台の設置場所が一連の流れの中に設置されているわけではなく、バラバラに分散していることによって、結果コミュニティ広場への流れも悪くなってしまったのだと考え、改善する必要があると思った。一方でコミュニティ広場を設置することによって、ランナー同士だけではなく、私たちスタッフもランナーの方々と交流することが出来た。ランナーとスタッフが一体となることで、初めて一つの大会が成立するのを肌で感じた。

企画3の「高校生臨時給水所」ではランナーの要望に応えることが出来た。また、飲み物を直接ランナーに手渡ししたので、ランナーを間近で応援することが出来た。

企画4の「なまえ応援隊」では、直接名前を呼んで応援することで、ランナーの力になることが出来たと思う。しかし、ランナーが一斉に来ると全員の名前を呼ぶことが難しくなった。全員の名前を呼ぶことが出来るような努力や工夫が必要だと思った。

企画5の「古里観光地めぐり」では、初めての企画だったが、多くの同伴者の方々が参加され、楽しんでいただけた。これからも続けていきたい。今回は小代区の「うへ山の棚田」だったが、小代区だけを観光してもらうのではなく、範囲を香美町全体に広げると、もっと同伴者の方々に喜んでもらうことが出来たり、香美町について知っていただけたりするのではないかと思った。



図9 活動の検証と考察

4-3 まとめ

(1) 高校生企画の反省点・良かった点・やってみたいこと

高校生企画や大会運営について改善点などを知るために、村高生徒全員の残酷マラソンの感想とアンケート調査をもとに、地域創造類型3年生がグループに分かれてKPT法でまとめた。

Keep	: 企画を通じてとても良かったと感じたこと。今後も行っていきたい事。
Problem	: 企画を通じて問題があったので解決したい事。この後、企画を行う上で気をつけたい事。
Try	: 今回の企画ではできなかった新たに挑戦したい事。Problemの反省を経て、改善していきたい事。

【高校生企画の反省点 Problem】

- ・ランナーとのハイタッチの時にもっと笑顔でふるまうこと。
- ・ランナーの方がコミュニティ広場のことを、なかなかコミュニティ広場だとわかってくれなかったこと。
- ・名指し応援の際、名前と名前がかぶってしまい呼べないときがあったこと。
- ・何回も踊っているうちにスタート応援の演舞が雑になってしまっていたこと。
- ・棚田バスツアーで聞かれたことに対して少しあいまいに答えてしまったこと。

【良かったこと、継続していきたいこと Keep】

- ・今回行ったスタート応援の充実。
- ・それぞれの高校生企画がランナーの方に響いたこと。
- ・笑顔でランナーをおもてなしできたこと。
- ・大きな声で名指し応援ができたこと。
- ・スタート応援のハイタッチはランナーにより近いところで応援できたこと。
- ・観光地めぐりで付き添いの方との交流ができたので、続けていきたい。
- ・名指し応援が微力ながらランナーの力になった。

【今後やってみたいこと Try】

- ・高校生が運営するマラソン大会
- ・今度はランナーとして参加する

5. 展望

私たちはマラソン大会をより魅力ある大会にするために、アンケート調査を行い、その結果から高校生企画を考え、地域創造類型の仲間や主催者と話し合ってきた。そして参加してくれた方々に対して、おもてなしができる企画を実行に移すことができた。しかし、反省してみると、もっと最高のおもてなしができるのではないかと思った。例えば、コミュニティ広場の位置が微妙な位置にあったので、来年以降位置を変えてみることや、もっとここにコミュニティ広場があるんだということを示していくことが必要だった。そういった点を改善していけば、より多くのランナーとの交流ができて最高のおもてなしに近付くことができると思う。今後の課題として、高校生が運営するマラソン大会の実現のためにはどうしていくべきなのか、またランナーの方、同伴者の方、主催者側みんなが「笑顔」になれる企画・運営という点が挙げられた。

これらの地域活動から学んだことは、私たち高校生がしたいこと、高校生が実際にできること、(地域から)求められていること、が重なったことをすることで、高校生でも地域を変えるきっかけになるということだった。高校卒業後は、マラソン大会にランナーとして参加することで、違った目線から大会を見ることができるようではないかと考えている。スポーツイベントだけでなく、様々な地域の活動に目を向け関わり続けていきたい。

6. 生徒感想

地域のスポーツイベントに深く関わっていく中で、私は、地域の魅力を再確認できました。大会に参加して下さったランナーの皆さんが口をそろえて言うのは、「地元の人たちの温かさが良い!」ということです。地域の魅力はおいしい食べ物やきれいな景色などたくさんありますが、やはり一番は「人」だと思います。地元の人々とランナーとのかかわりから、人と人との繋がりが生まれる。そしてそれは地域を知ってもらうことにもつながります。ほんの些細なきっかけ、つながりから、地域活性の道が開けるということをこの活動で感じることができました。地域探求の活動は私が夢をみつけるきっかけとなりました。卒業後も様々な取り組みを通して感じたことや考えを大切に、地域に関わり続け、地域活性に貢献できる人材になりたいと思っています。地域創造類型の仲間、先生、そして地域の方々とともに学び、考えた三年間は本当に大切な人生の糧となりました。ありがとうございました。

【3年1組3番 井上陽菜子】

私は、地域創造類型に入る前まで地域と真剣に向き合う事が無かった。しかし、改めて香美町を見ていると、とても良いところだと感じるようになった。確かに、店も少ないし交通の便はよくないなど悪いところもあるが、都会とは違ったよいところがある町だ。香美町はこれからも進歩を続けていき、将来消えてしまうことがないように願う。

私は将来、医療関係の仕事に就きたいと思っている。しかし、香美町にはそのような専門学校や大学がないので一度は町を出ることになるだろう。しかし、いずれは香美町に戻り医療施設に就職したいと思う。そして自分が香美町外で学んできた知識を教育施設・医療施設などで伝える活動をしたいと思う。子供たちの未来の選択の幅が広がると思うし、微々たる物ではあるが香美町の医療も進歩するかもしれない。

これまで地域を学び、人の力がそのまま地域活性化につながると知ることができた。少しでも可能性があれば、諦めずに挑んでいく姿勢が大切だと、実感できた。

【3年1組4番 今井伸弥】

私は、スポーツイベントを通しての地域活性について学んできて、地域でスポーツイベントを開催することにより、地域が明るくなり活気が出て、地域活性化につながることがわかりました。地域全体でそのスポーツイベントを成功させようと協力しあうことにより、地域の団結力も強まると思います。

また、スポーツイベントを行うことにより、他地域からの参加者の方々と地域の方々とをつなげることができると思います。そして、一緒にイベントを楽しむことにより、地域も元気になります。イベントで、他地域の方々と地元の方が交流することにより、地元の方は、地域の新しい魅力に気づくことができ、もっと地元が好きになると思います。

スポーツイベントを開催するだけで終わるのではなく、そのあとの地域活性化にもつながることで、もっと地域が元気になり、多くの方にも地域の魅力を知ってもらうことができると思いました。

【3年1組9番 小西菜津美】

私は地域創造類型に入り、今まで興味を持たなかったようなことや、考えたことのないようなことに取り込むことができ、とても充実した3年間を過ごすことができました。町長との意見交換や、地域の方々に私たちが1年間学んできたことを発表する村高フォーラムや村高主催の教育講演会など村岡高校でしかできないような経験ができました。また、スポーツイベントでのアンケート調査やタウンミーティング、夢会議などたくさんの方と話をしたり、人前でしゃべったりする機会が多く、話し方や聞き方、人との接し方などこれから社会に出ていく上で、必ず必要となることを学びました。さらに、地域創造類型に入るまでは、漠然と香美町が好きだと思っていましたが、地域探求を通して、なぜ香美町が好きなのか、どこがいいのか、というようなことが具体的に分かり、さらに香美町が好きになったし、もっと知りたいと思いました。私はここまで家族だけに育てられてきたわけではなく、地域のみなさんにも育ててもらい、ここまでできました。だから、将来香美町に帰ってきて、地域のみなさんの役に立てるよう大学でしっかり勉学に励み、広い視野でいろんなことを考えられるような人になって帰りたいと思います。

【3年1組14番 田野歩佳】

スポーツには心と体を元気にする力があると思います。そして健康的な体づくりに影響を与えるにはスポーツも含まれます。私が住む町香美町は、マラソンとウォーキングによるスポーツイベントが盛んであるように思われます。

地域活性とはどういうものでしょうか。私はこの言葉は都市部には当てはまらないものだと思っていました。ですが、都市部は都市部で人を惹きつけるものがあるし、田舎は田舎でそういうものがありました。その地を活かして活性させている取組というのは共通していると思います。

オリンピックがあったら開催国がわくように、人々をわかせる地域に力を与える役割をスポーツイベントも果たす、というのは素晴らしいです。探求活動を通してそれらを学ぶことができよかったです。

【3年1組15番 田村理紗】

3年間の地域創造類型での活動を通して、私は地域活性化の難しさを知りました。

まず難しさについてですが、私はフィールドワークをしているときよりも、学校で自分たちのやったことのまとめをしたり、次にできることを考えたりしているときのほうが辛かったです。人口減少や高齢化などの難しい問題の中で、自分たちがどのようにかわっていくことで、地域を活気づけられるか話し合っただけで形にしていくのはとても難しかったです。

一方で、楽しいこともたくさんありました。特に地域に実際に出て行って、地域の人と交流することはすごく楽しかったです。このことがいろんな地域創造類型の活動のモチベーションになっていました。

いろんなことがあった3年間でしたが、先生方や地域の方のおかげでやり抜くことができました。ありがとうございました。

【3年1組22番 西村さおり】

私は3年間地域創造類型で、スポーツイベントを通しての地域活性化について学びました。最初は自分たちがしていることがよくわかりませんでした。しかし残酷マラソンやダブルフルウルトラランニングに参加し調査することで、少し意味が分かるようになりました。というのも調査をする中で、アンケートをするのですがその中で人と話す機会が多くありました。その話の中に人のぬくもりを感じに来たという方がいました。話を聞くと町のほうではこのような人のぬくもりを感じられないそうです。私はただマラソンが好きで走りに来ているのかと思っていたので勉強になりました。また私はこれらの活動を通して地域に対する考え方が変わりました。もともとは都会に出て働くつもりでしたが、地域のことを調べれば調べるほど地域のために働きたいと思えるようになりました。私はこれからもこの地域で暮らしていきたいです。

【3年1組27番 矢野泰山】

スポーツイベントを通しての地域活性化を行って来て思ったのは、最初自分一人の力では何も変わらないと思っていましたが、実際アンケート調査をしてみて、分析、企画、構成し、実行委員長と何度も検討し合っていていき、大会で高校生企画を実行に移すことができました。

そして高校生企画実行はランナーの方々から生の声で「よかったよ」、「名指し応援隊には、びっくりしたけど元気が出たよ」、「高校生がスタッフとして活動しているなんてなかなか珍しいマラソンだね」など沢山の声をかけていただきました。

こういった活動を通して、自分たち高校生がしたいこと、自分たち高校生ができること、地域から求められていること、この3つが重なったことをすることで、高校生でも微力ながら、地域を変えるきっかけづくりができるのではないかと思いました。今後は、ランナーとしてマラソン大会に参加してみたいと思っています。

【3年2組1番 東竜也】

私はスポーツイベントを通して、人の笑顔や喜びの声を直接聞いたことにより、人に喜んでもらったり、笑顔を見たりすることの喜びを感じました。私は初め、「マラソン大会だから、ランナーの方々は走るためだけに来ている。」と漠然と思っていました。もしかしたらそうなのかもしれません。走りたいから大会に参加されるのだと思います。しかし私は、3年間の活動のなかで、「走るためだけの大会」ではなく、「走りたくなる、走るのが楽しくなる大会」をつくっていきたいと思いました。マラソン大会だけに限らず、参加された方が会やイベントを楽しんでもらうことはもちろん、それに加えて、香美町のウリである、豊かな自然や人の温かさを感じてもらい少しでも、「香美町っていいところだな」と思ってもらえるような観光やイベントをつくっていきたいと思いました。最後に、私たちの活動を支援し、見守ってくださったみなさん、ありがとうございました。

【3年2組8番 上田菜月】

私達が、残酷マラソンをより魅力的なものにするために考えるうえで、大切にしたのは、残酷マラソンらしさです。残酷マラソンらしさとは、「人との繋がり、温かさを感じられる大会」であると私たちは考えます。その「らしさ」を私たちが携わらせていただく中で、現状よりもっと魅力的なものにできるように、試行錯誤しながら、5つの高校生企画などを実行していきました。私は、この活動を通じて、物事の特徴を考えながら行動することの大切さを学びました。

スポーツイベントを一つの教材として、私たちは地域を学び、地域を元気にするための方策を考えてきました。その過程で行う仲間との議論や地域の方との交流の中で、私は自分の地域の課題を他人事にせず、自分のことのように考えられるようになりました。この経験は自分にとってとても大きなものだったと思います。関係者の方々、ありがとうございました。

【3年2組20番 西田将馬】

地域創造類型として学んできた三年間は、本当に新しい体験ばかりで、すること全てが初めてであった。そこで私は、地域のこと、香美町の現状について知ることができ、大変充実した三年間を送ることが出来た。私は初めて会う人と喋ることが苦手で、大勢の人が集まる行事や買い物に行くことさえも嫌いだった。そんな私でも、「地域探求」でたくさんの行事に参加して、大勢の人前で発表し、挑戦することで自分の苦手なことを克服することができた。このことは私を成長させ、地域創造類型に入って本当によかったと改めて感じた。また、先生たちも親身になって関わってくれて、たくさんのことに挑戦させてくださり、学校生活も楽しく、授業も毎回楽しく受けることができた。さらに地域探求の授業を受けることにより、今まで以上に地元、香美町のことを好きになり、香美町は財政的に厳しいことも、見た目は自然が豊かでも、細部をみてみると汚れているところがあり、普通なら気付かないようなこともわかった。この取り組みの中で発見した一番の危惧が、香美町が消えてしまうかもしれないということだ。このままいけば人口も減少し、商業も衰退してなくなってしまう。自分が育ってきた香美町がなくなってしまうのは大変悲しい。だから私は将来必ず香美町に帰ってきて、自分を育ててくれた香美町で「あるものさがし」を行い、あるものを活かして香美町を無くならせない取り組みを実行し、活性化させて、地元へ恩返しをしたい。

最後にこの三年間の中で携わってきた方々に感謝をして、今まで習ってきたことを活かして、地元へ恩返しをできる人材になりたい。そして感謝の気持ちを忘れず、人との出会いを大切に、これからも学び続けていきたい。

【3年2組25番 福田静也】



7.おわりに

この1冊には、地域創造類型第2期生11人のメンバーで3年間共有してきた学習の成果と思いが込められています。いわば成長の証だと思います。私にとっても11人と一緒に「探求」できた時間は宝物です。

思い起こせば、「スポーツによる地域活性化」をテーマにスタートしました。自然環境を活用したスポーツや健康づくりを想定していましたが、元々、村岡地域特有のスポーツイベントやスポーツ文化が豊富に存在しており、それらを継承し発展させることが11人のメインテーマになっていきました。その過程で、オリエンテーリングをしたり隠岐島へ行ったりと寄り道もしましたが、他の地域の有り様や違った視点も得ることができたと思います。探求の過程でいろいろな報告の検証やデータ分析を行いゴールへ導こうとしましたが、ゴールへの道は多様にあったと気づいたはずです。「地域」へのアプローチも同様に多様に存在することを学んだはずです。

今後の11人の人生において多様性に気づいた視点を大切に、それぞれの「地域」で活躍していくことを期待しています。

鳥取大学地域学部 地域教育学科 准教授 関 耕二



「自然環境を活用したスポーツによる地域活性化の検討」 -ランナーからみた村岡地域におけるマラソンイベントの特徴と参加動機について-

鳥取大学 地域学部 地域教育学科 准教授 関 耕二

I 緒言

近年、多くのスポーツイベントが開催されている。全国レベルのスポーツイベントにおいて開催地は、インフラ整備や観光客誘致などの経済効果を期待し、地域のスポーツイベントにおいても経済効果のほかに知名度のアップ、観光客誘致及び住民意識の高揚など様々な効果が期待され、全国各地でスポーツイベントが開催されている。

スポーツイベントは、「観るスポーツ」「するスポーツ」「支えるスポーツ」の三つに分類されている。「観るスポーツ」は、プロ野球、Jリーグをはじめ高いレベルを誇る競技が数多くあり、多くのファンを魅了している。また、「するスポーツ」はランニング、ウォーキング、サイクリングなどが世代を超えて人気を集め、スポーツイベントに集う人々が地域に活力を与えている。次に、「支えるスポーツ」は、地域に密着したスポーツチームの運営、市民ボランティアとしての大会支援、国や地域を挙げての国際競技大会・キャンプ誘致等、国・地域の魅力の効果的発信に寄与している¹⁾。「するスポーツ」において人口は伸びているが、特に屋外スポーツのウォーキング、ジョギング・ランニング、サイクリングの分野は愛好者人口が多く、増加人数も多い²⁾。また、2007年の東京マラソンが成功したことを契機に、多くの大都市でマラソン大会が開催されるようになった。さらに、マラソンのテレビ放映や沿道での観戦、スポーツボランティアが注目されるなど、マラソンイベントに関連した多くの報告がみられるようになった³⁾⁴⁾⁵⁾。

一般的にマラソン大会は、東京マラソンや京都マラソンのような42.195km走るフルマラソンや、それ以下の距離を走るハーフマラソンや10kmマラソン、フルマラソン以上のウルトラマラソンがある。それら以外にも、自然の中を走るトレイルランニングがある。日本トレイルランニング協会は、自然の路面が75%以上、自然の障害物、激しい高低差、美しい景観が得られることを、トレイルランニングの必須条件としている⁶⁾。しかし、日本は国土の約70%が山岳地帯であるが、山岳を利用したマラソンイベントが少ない。また、一般的なマラソンイベントは「自分なりの目標で走る」レクリエーションスポーツから、「一般市民といえども、秒単位で他人との順位を争う」窮屈な競技へと変化した結果、「もっと自由で、もっと自分自身と密になれる世界」を一部のランナーが求め、ウルトラマラソンやトレイルランニングへ興味移った可能性が指摘されている⁷⁾。このように、一般的なマラソン大会と山岳地域のマラソン大会では、ランナーの参加動機が異なることが予想されるが、不明な点が多い。

そこで、兵庫県美方郡香美町村岡の山岳地域で開催されている「みかた残酷マラソン全国大会」（以下、残酷マラソンと示す）と「村岡ダブルフルウルトラランニング」（以下、ダブルフルと示す）を事例としてイベントの特徴と参加動機について検討を行うことを目的とした。

2. 研究方法

2-1 研究内容

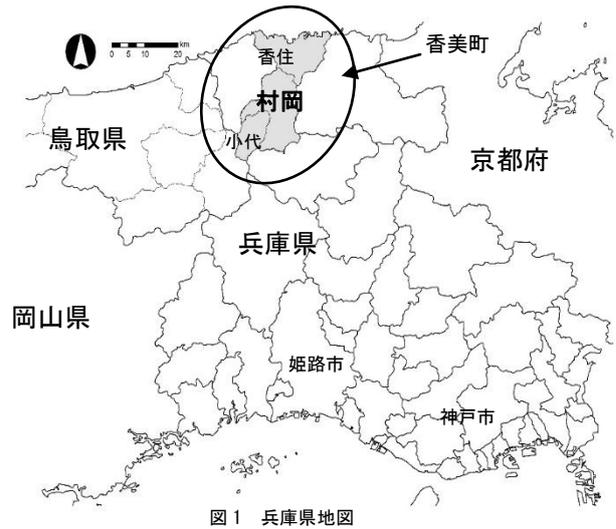
大会参加者の特徴を検討するために、アンケート調査とインタビュー調査を実施した。

アンケート調査では、参加者の特徴を知るために、性別、年齢、居住地、職業、運動習慣、同伴者有無及び人数を記入形式で調査した。また、宿泊地、他大会への参加状況、大会情報入手経路については選択形式とした。村岡で行われるマラソン大会独自の特色を調査するために、景色、コース、自然環境、エイド、ボランティア、交通の便、高校生など18の項目を提示し、良かったと感じる項目を選択する形式とした。

インタビュー調査では、参加動機や過去の大会の参加状況、走った感想を質問することでアンケートに反映しきれない意見や他大会には無い村岡独自の魅力があるのかという点に着目し、質問を行った。インタビューにおいても調査対象の特性を明らかにするため、性別、年齢、居住地の確認を行った。

2-2 対象

アンケート調査は兵庫県立村岡高等学校地域創造類型の生徒及び教職員と共同で実施した。本調査は、2013年6月9日(日)、2014年6月8日(日)に行われた残酷マラソン、2013年9月29日(日)、2014年9月28日(日)に行われたダブルフルのゴール者に対し、ゴール地点付近の休憩所でアンケート用紙を配布した。インタビュー調査については、2014年村岡ダブルフルウルトラランニング参加者に対して、鳥取大学の学生3名で行った。調査の際、調査対象に偏りがでないよう、様々な年齢、性別の参加者に対し調査を行った。



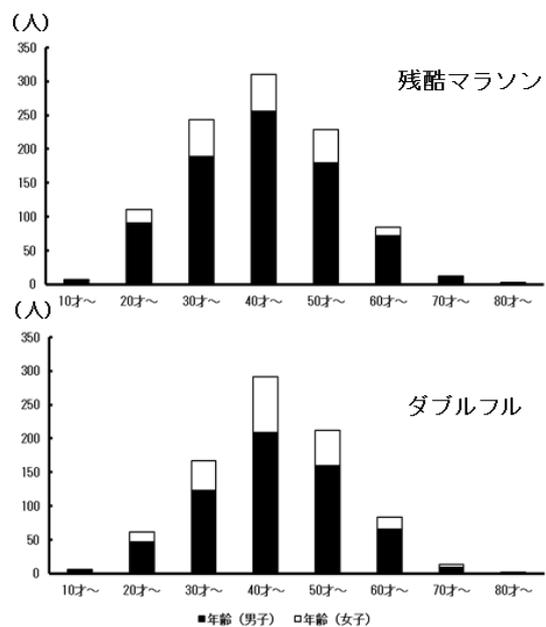
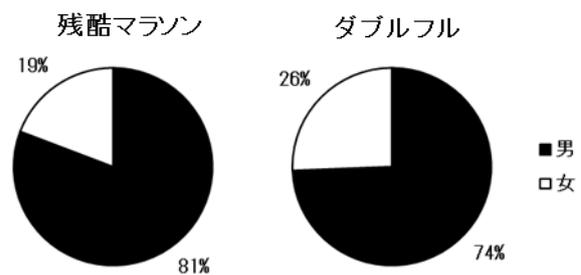
3. 結果及び考察

本研究の対象となったダブルフルの参加者は2014年が1802人、2013年が1592人であり、残酷マラソンの参加者は2014年が2105人、2013年が2425人であった。

本調査で回収したアンケートは、残酷マラソンでは2014年が199枚、2013年が1020枚であり、ダブルフルは2014年が307枚、2013年が845枚であった。尚、2014年の残酷マラソンのアンケートは、雨天などの影響があり回収数が少なかったため、2013年のアンケートを分析に使用した。また、本調査でインタビュー調査は、2014年のダブルフルで実施し、42人から回答を得た。

3-1 村岡地域のマラソン大会の特徴

残酷マラソンは、全長24km、高低差が408mというアップダウンが激しいコースである。しかし、マラソン未経験の女性がコースの8割歩いても4時間という時間制限以内に完走できるように配慮されているマラソンイベントである^{8) 9)}。また、ダブルフルは、兵庫県村岡を囲む鉢伏山(ハチ北高原)1221mや蘇武岳1074mなど、1000m級の山々を巡る、日本屈指の山岳ウルトラマラソンである。距離は、44、66、88及び100kmと選ぶことができる。高低差は44kmでは470mあり、66、88及び100kmでは900mある¹⁰⁾。このように、今回対象とした二つのマラソン



大会は高低差が大きいコースが特徴であった。一方、フルマラソンの公認コースでは、高低差がスタートとフィニッシュ地点で距離の0.1%以内という規定がある¹¹⁾。以上のことから、村岡地域のマラソン大会はどちらも高低差400m以上と、フルマラソンでは味わうことのできない過酷な地形を活用したコースであった。

3-2 参加ランナーの特徴

参加ランナーの特徴を検討した結果、性別については両大会とも男性が70%以上を占め、女性が20%を占める結果となった(図2)。また、年齢については40代が最も多く、次いで30代や50代が多く参加していた(図3)。2014年の大阪マラソンの調査で、参加ランナーの性別は男性76%、女性は24%であり、年齢は40代が37%で最も多く、次に30代が26.2%で、50代が21.5%であった¹²⁾。また、2014年の東京マラソンでは、参加ランナーの性別は男性80%、女性が20%であり、年齢は40代が33%と最も多く、次いで30代が30%で、50代が18.3%であった^{13) 14)}。これらのことから、村岡地域のマラソン大会の参加ランナーは、男女比や年齢構成において他のマラソン大会と同様な傾向であり、明らかな特徴は確認できなかった。

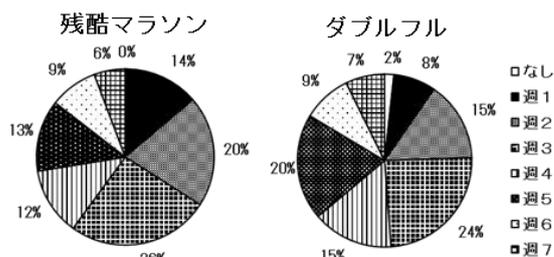


図4 村岡地域におけるマラソン大会参加ランナーの運動習慣

参加ランナーの運動習慣については、1週間で運動をしていないと回答したランナーが残酷マラソンは0%、ダブルフルは2%であったが、週3回と回答した参加ランナーは残酷マラソン26%、ダブルフルが24%と最も高かった(図4)。2011年の東京マラソン参加ランナーに対しての普段のランニングや練習についての調査では、ランニングをする頻度は、「週に2~3回程度」が46.6%と最も高く、次いで「週に1回程度」が20.4%と、週に2回以上が全体の約7割占める結果であった¹⁵⁾。村岡のランナーは週に2回以上が全体の80%~90%を占めていたことから、東京マラソンと比較すると運動習慣があるランナーが多く参加する傾向がうかがえる。インタビュー調査において「練習として参加」「訓練になる」と回答したランナーがいた。村岡地域のマラソン大会は、習慣的に運動を行っていない者にとっては敬遠される可能性が考えられる。しかし、参加ランナーは過酷な地形を活用したコースを理解した上で参加するアスリートタイプが多く存在する可能性が考えられる。

参加ランナーの居住地は、地元の兵庫県が最も多く、次いで、大阪、京都といった近隣の都市が多かった(表1及び表2)。また、兵庫県内では神戸市や姫路市という人口が多い市からの参加も多かったが、開催地の美方郡の参加も同様に多かった(図5)。さらに、インタビュー調査において「地元の大会だから盛り上げたかった」「地元出身だから」と回答した参加ランナーがいた。このように、村岡地域のマラソン大会は、近隣や地元からの参加ランナーが多く、村岡地域を盛り上げようという動機が考えられた。

表1 村岡地域におけるマラソン大会参加者の居住地

居住地	残酷マラソン		
	男	女	計
兵庫	406	86	492
大阪府	187	43	230
京都府	63	30	93
岡山	48	5	53
鳥取	23	9	32
奈良	19	5	24
愛知	14	3	17
滋賀	6	4	10
島根	9	0	9
広島	8	1	9
徳島	7	2	9
和歌山	5	0	5
香川	1	2	3
東京都	0	2	2
神奈川	1	1	2
三重	1	0	1
その他	15	1	16

表2 村岡地域におけるマラソン大会参加ランナーの居住地

居住地	ダブルフル		
	男	女	計
兵庫	278	74	352
大阪府	110	41	151
京都府	40	23	63
岡山	36	10	46
徳島	22	15	37
鳥取	25	7	32
奈良	18	8	26
東京都	12	7	19
愛知	10	6	16
滋賀	8	6	14
神奈川	7	5	12
三重	7	2	9
広島	7	2	9
香川	7	0	7
和歌山	4	2	6
島根	4	0	4
その他	22	7	29

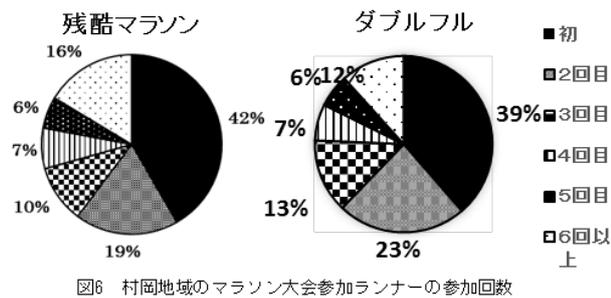


図6 村岡地域のマラソン大会参加ランナーの参加回数

参加ランナーの参加回数については、初参加と回答した人が残酷マラソンは48%、ダブルフルは42%であり、次いで、2回目の参加と回答した人が残酷マラソンは21%、ダブルフルは26%であった（図6）。このように、村岡地域のマラソン大会はリピーターが半数以上いることが明らかになった。

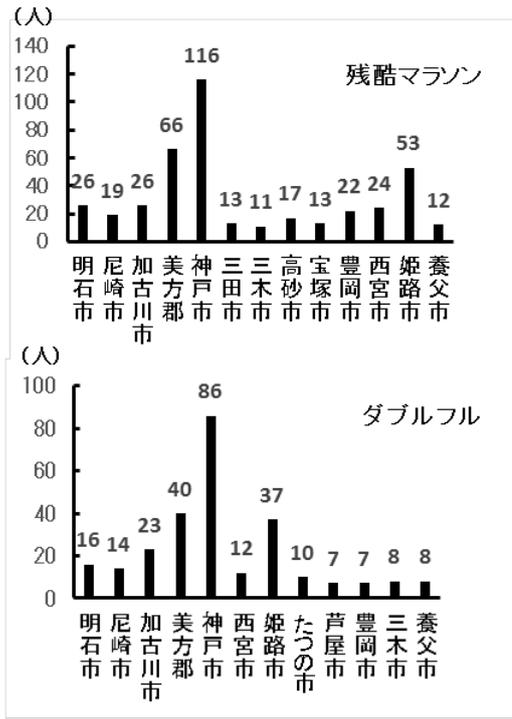


図5 村岡地域におけるマラソン大会参加ランナーの兵庫県居住者の多い地域

3-3 参加ランナーからみた村岡地域のマラソン大会の評価

アンケート調査により、マラソン大会の満足度（ダブルフルのみ：単位は%とした）を質問した結果、100%と回答した参加ランナーが44%と最も多く、次いで100%が29%、80%~99%が24%と、80%以上が9割を占めるという結果になった（図7）。インタビュー調査において「達成感がある」「楽しい」と回答したランナーが多数いた。

アンケート調査により、「来年参加したいか」（残酷マラソンのみ）と質問をした結果「とても思う」が77%で、「少しそう思う」が20%であった（図8）。インタビュー調査において「何回も続けたい」「癖になる」と回答したランナーが複数いた。

アンケート調査により、「他の大会より良かったか」と質問した結果、「大変そう思う」が8割を占め、「少しそう思う」が1割強を占めた（図9）。また、インタビュー調査において「都市型にないコースが魅力的」「都市のマラソンと違い、景色やエイドの多さ、ボランティアの雰囲気が高く」「アップダウンが激しく、スピードがでないから精神力が必要」と回答したランナーが複数いた。

これらことから、村岡地域のマラソン大会はランナーに好意的に評価され、満足度も高くリピーターの獲得につながっている可能性が考えられる。

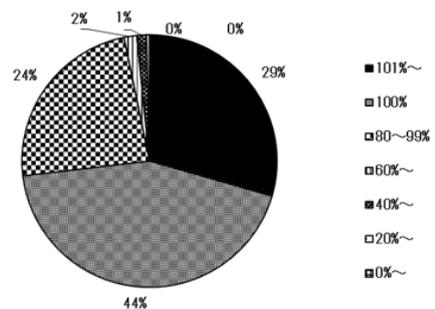


図7 ダブルフルにおける満足度

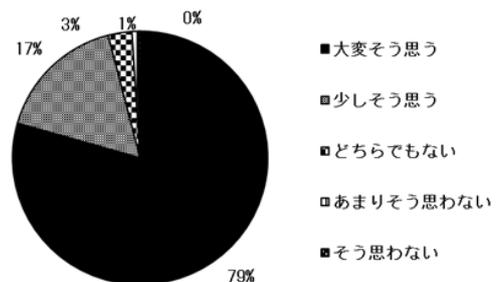


図8 残酷マラソンにおける「また来年参加したいか」

3-4 参加ランナーからみた村岡地域のマラソン大会の特徴

アンケート調査により、景色、コース、食べ物、ボランティア及び自然環境など 18 の項目を提示し、良かったと感じる項目を選択式で回答を得た。その結果、両大会で比較的高いと判断できる項目は、景色、コース、食べ物、ボランティア、自然環境、エイド、ハイタッチであったが、比較的低いと判断できる項目は、交通の便、トイレ及び更衣室であった（図 10）。このように、食べ物、ボランティア、エイド及びハイタッチは、他のマラソン大会でも行われているが、肯定的な回答が多いことから、村岡地域のマラソン大会の運営が、参加ランナーに評価されていると考えられる。さらに、景色、コース及び自然環境は、村岡地域特有の地形や自然が評価されていると考えられる。鹿児島県で開催されているいぶすき菜の花マラソンはフルマラソンの中では高低差が 100 m あるという特徴的なコースであるためコースに対する満足度は低いと報告されている¹⁶⁾。一方で、村岡地域のマラソン大会は高低差の大きいコースであるにもかかわらず満足度が高かった。この村岡地域のマラソン大会に対するランナーの評価の高さは、高低差の大きいコースを良い特徴と感じていることや、コース以外の大会運営が影響している可能性が考えられた。しかし、交通の便、トイレ及び更衣室については評価が低いので、今後検討が必要であろう。

また、インタビュー調査においても「エイドが豊富」「子どもからお年寄りまでの声援がよい」「景色がよい」「コースがきついのが良い」「都市型にないコースが魅力的」と回答したランナーが複数いた。このことから、アンケート結果と同様に、運営や応援が評価され、地形的な面でも都市型のマラソンとは違う魅力を感じているランナーが多かったと考えられる。

4. まとめ

本研究で対象とした村岡地域のマラソン大会は、一般的なマラソン大会では味わうことのできない過酷な地形を活用した高低差の大きいコースが特徴であった。参加ランナーの満足度が高いこと、リピーターも半数以上いることなどから、比較的トレーニングを行っているランナーにとっては 1 度走ってみると好意的に評価する可能性が考えられる。それらの要因として、村岡地域全体でボランティアや沿道の応援という形で携わることで、地域一体となってマラソン大会を盛り上げようとしている大会の雰囲気や大会運営の成果が考えられる。しかし、地域内や近隣地域での参加ランナーは多いが、地域外や県外からの参加ランナーは少ない状況であった。今後は、村岡地域特有のコースや参加ランナーの特性を踏まえた視点から他地域への広報活動が課題であろう。

また、マラソン大会のゴールエリアでは地元の特産や観光名所の紹介や販売などを住民が精力的に行っていた。今後、地域外からの参加ランナーがさらに増えることで、地元住民の意識高揚だけでなく村岡地域の知名度アップや観光客の増加などの経済的効果も期待される。

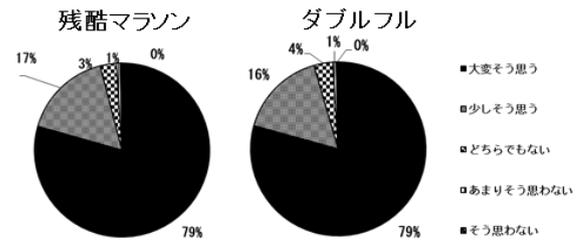


図9 村岡地域における「他の大会より良かったか」

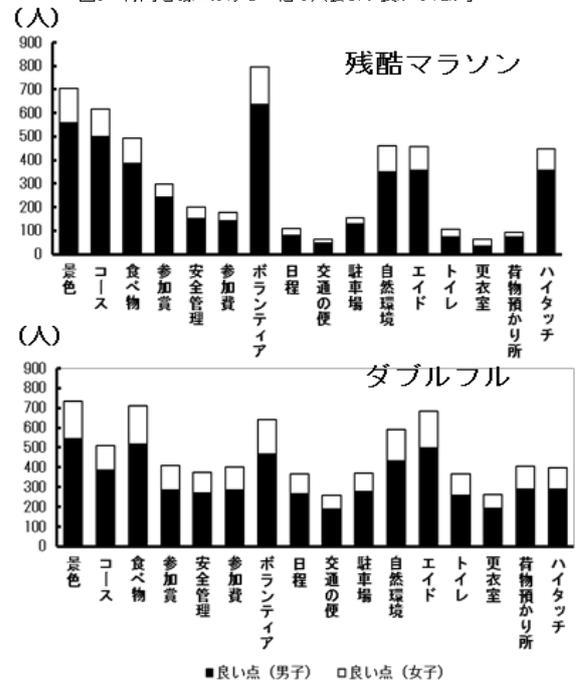


図10 村岡地域におけるマラソン大会参加ランナーの「大会の良かった点」

謝辞

本研究を実施するにあたりアンケート調査及びインタビュー調査に回答していただいた参加ランナーの皆様、ともにアンケートを回収していただいた兵庫県立村岡高等学校地域創造類型の生徒及び教職員の皆様に、さらには大会実行委員の皆様に心より感謝いたします。

追記

本研究の一部は、文部科学省特別経費事業（H24-H27）「地域再生を担う実践力ある人材の育成及び地域再生活動の推進」の助成により行われた。尚、本研究鳥取大学地域学部地域教育学科の学生である澤田美稀、田川寛、西村知也及び森田岬の4名の「地域調査実習」の一部としてまとめられた。

主な引用・参考文献

- 1) スポーツ・ツーリズム推進連絡会議（2011）スポーツ・ツーリズム推進基本方針～ スポーツで旅を楽しむ国・ニッポン～
- 2) 笹川スポーツ財団（2002-2010）全国調査スポーツライフに関する調査結果報告
- 3) 先森仁・秋吉遼子・山口泰雄（2014）大会満足度と地域愛着が市民マラソンの再参加意図に与える影響に関する研究
県内・県外参加者に着目して 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 第8巻 第1号 107-113
- 4) 矢野宏光・中澤謙・吉川政夫・今村義正（1996）ウルトラマラソン参加者の心理的分析（2）-大会参加者の参加目的と日常生活におけるウルトラマラソンの重要度について- 日本体育学会大会号 第47号 218
- 5) 山中鹿次（1995）市民ランナーのマニア化傾向について：フルマラソン年間多数参加、ウルトラマラソン参加者の調査などから日本体育学会大会号 第46号 190
- 6) 日本トレイルランニング協会公式ホームページ（2015.2.1現在） <http://www.trail-japan.com/about/>
- 7) 後藤新弥（2011）加速する限界挑戦型スポーツ-中高年が主力：市民スポーツ先端領域の実態調査-、江戸川大学紀要 第22号：293-309
- 8) 香美町ホームページ（2015.2.1現在） <http://www.town.mikata-kami.lg.jp/www/contents/1213339965046/index.html>
- 9) 株式会社ハイファイブ（2015.2.1現在） 但馬遊びナビ <http://butsuma-navi.com/navi/>
- 10) 村岡ダブルフルウルトラランニング公式サイト（2015.2.1現在） <http://www5.nkansai.ne.jp/org/muraokaultra/>
- 11) 財団法人日本陸上競技連盟，長距離競走路ならびに競歩路公認に関する細則 陸上競技ルールブック 410-412
- 12) 関西大学・読売新聞社（2014）第3回大阪マラソン共同調査研究-感動の大阪マラソンを求めて-
- 13) 一般財団法人 東京マラソン財団（2014）東京マラソン2014 出走者数・完走者数・完走率
http://www.tokyo42195.org/2014/press/files/140310_num_runners_final.pdf
- 14) 一般財団法人 東京マラソン財団（2014）東京マラソン2014メディアガイド
http://www.tokyo42195.org/2014/press/files/140222_media_guide.pdf
- 15) 株式会社博報堂DYメディアパートナーズ（2011）東京マラソン2011完走者を対象にランナーの意識調査を実施
- 16) 北村尚浩・川西正志・波多野義郎・柳敏晴・萩裕美子・前田博子・野川春夫（2000）生涯スポーツイベントの参加者の大会満足度-菜の花マラソン参加者のスポーツライフスタイルによる比較-
鹿屋体育大学学術研究紀要 第23号 25-31

附録

≪資料1. アンケート用紙≫

第21回みかた残酷マラソン全国大会に参加された皆様へ
村岡高校からアンケートのお願い

○残酷マラソンの残酷度は？ ()%

○走ることは好きですか？

大好き ・ 好き ・ どちらでもない ・ 嫌い ・ 大嫌い

性別 男性 ・ 女性 職業 ()

年齢 ()歳 運動習慣 無 ・ 有 → 週 ()回

1 残酷マラソンの参加回数 初めて ・ ()回

2 居住地 ()都・道・府・県 ()区・市・郡

3 宿泊しましたか？

しなかった ・ した → 小代地区 ・ それ以外 ()

4 同伴者はいましたか？

無 ・ 家族 () ・ 友人 ()

5 これまでに小代地区へ来たことはありますか？

無 ・ 小代地区出身 ・ 買い物 ・ 観光 ()
その他 ()

6 残酷マラソンをどのように知りましたか？

インターネット ・ 人づて ・ パンフレット ・ 雑誌 ()
その他 ()

7 残酷マラソン以外のスポーツイベントに参加したことはありますか？

無 ・ 有 ()

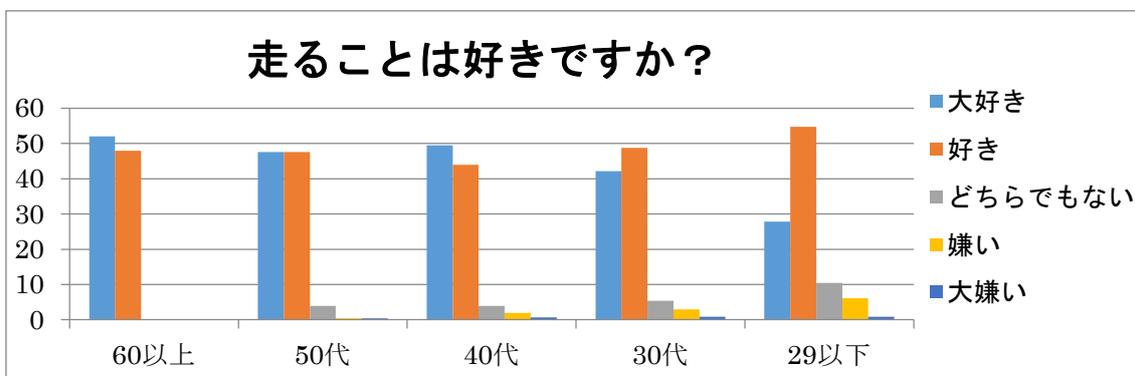
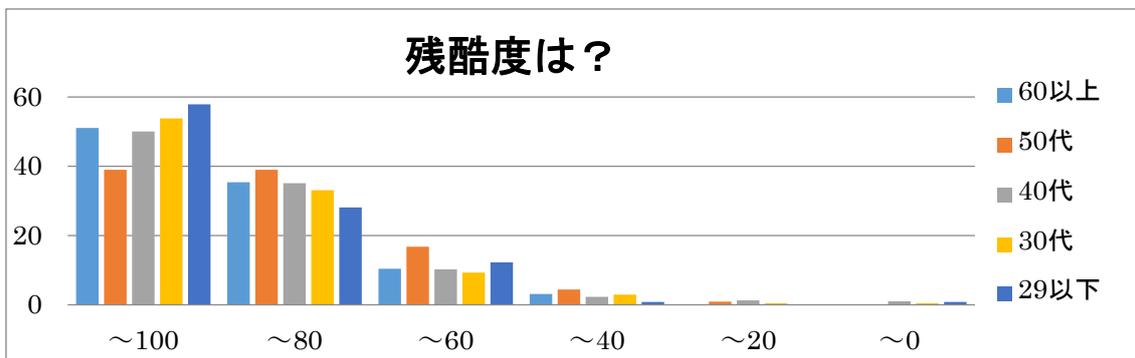
8 他のスポーツイベントと比べて良かったですか？

大変そう思う ・ 少しそう思う ・ どちらでもない ・ あまりそう思わない ・ そう思わない

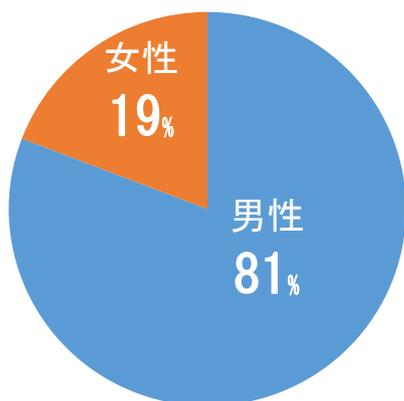
9 残酷マラソンの良い点に○をつけてください (複数回答可)

「資料2. アンケート結果」

2-1 みかた残酷マラソンアンケート集計結果



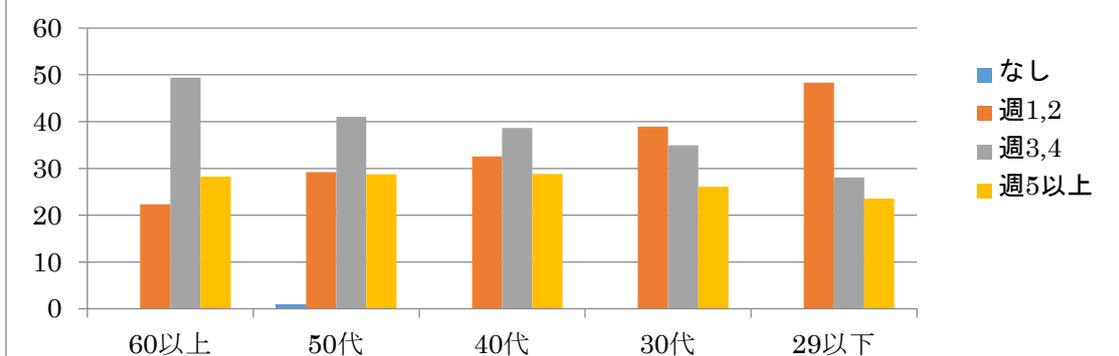
みかた残酷マラソン 参加男女比



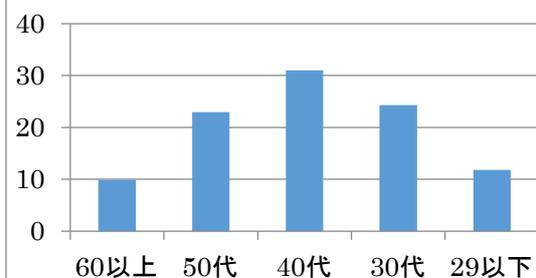
参加回数



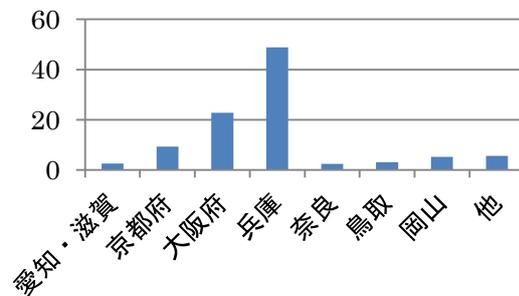
運動の習慣



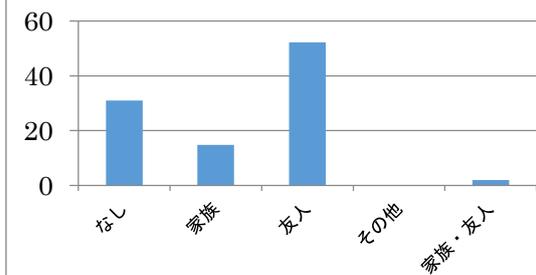
参加者の年齢



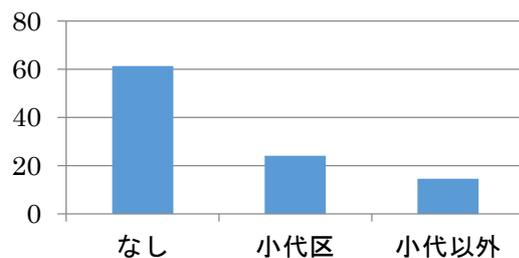
居住地



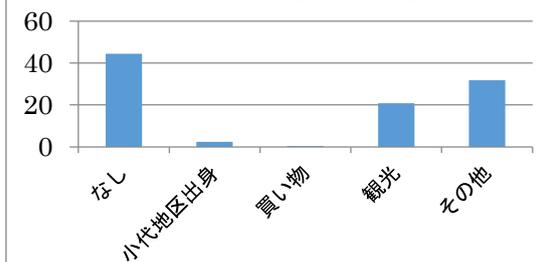
同伴者



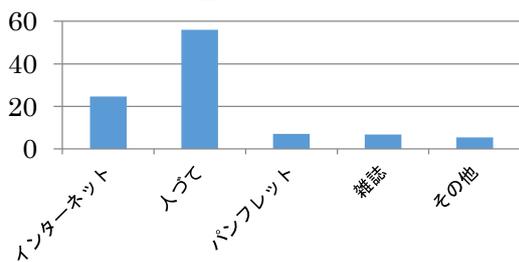
宿泊先



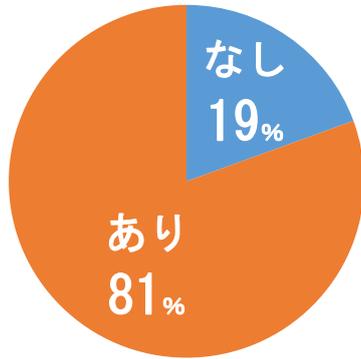
小代区訪問経験



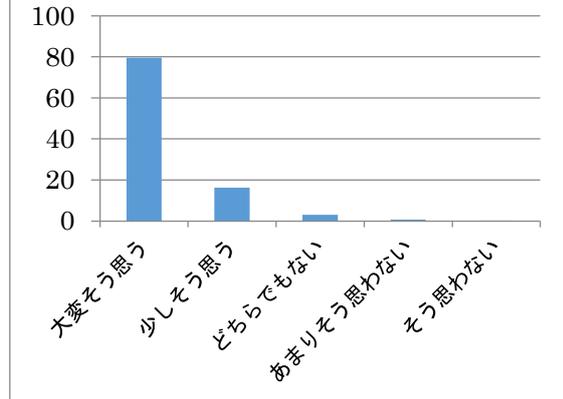
大会を知った理由



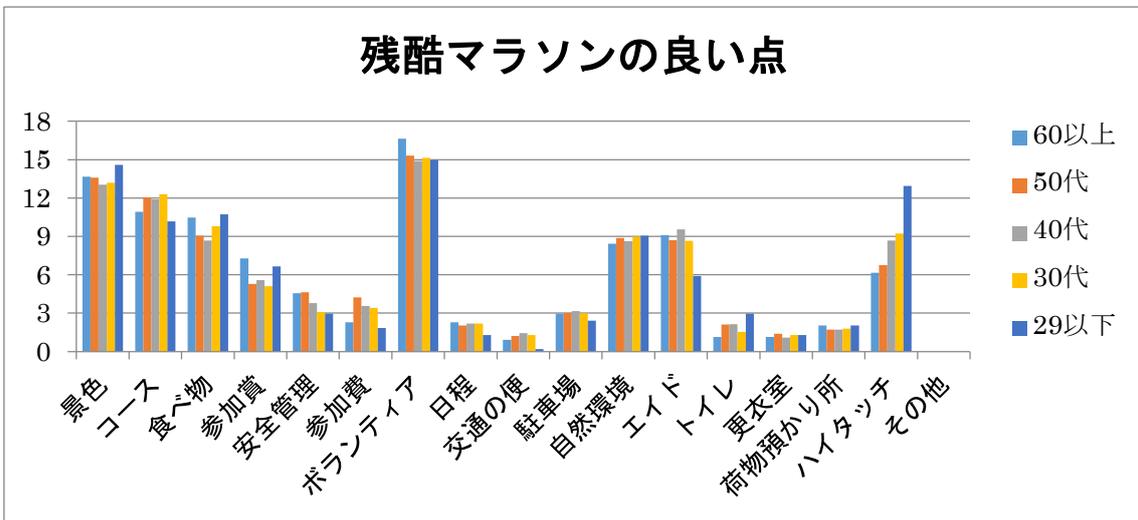
他の大会参加



他の大会に比べて良い

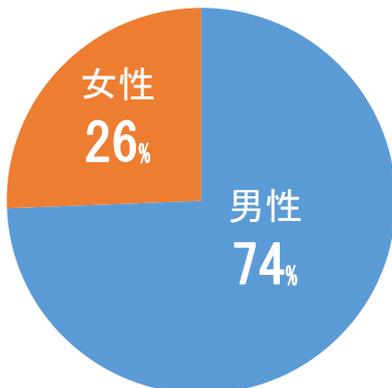


残酷マラソンの良い点

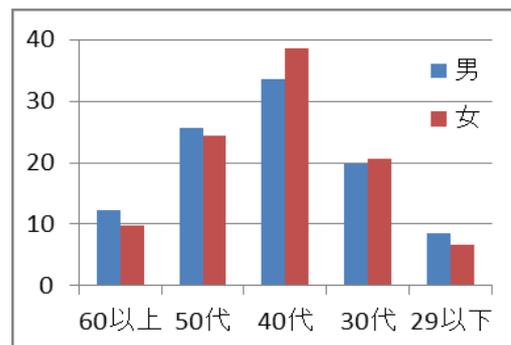


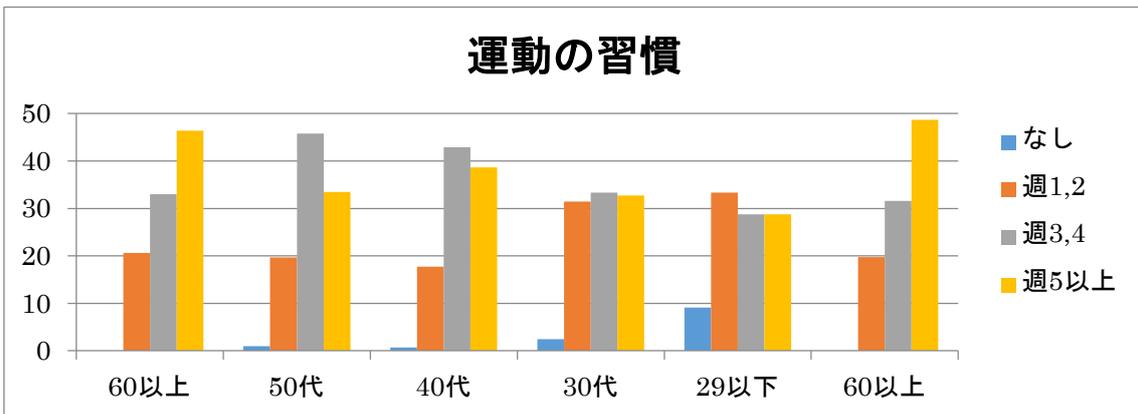
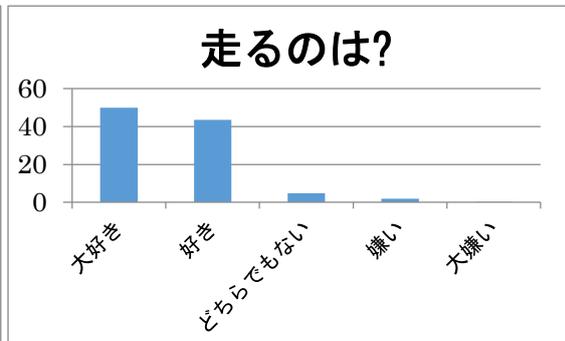
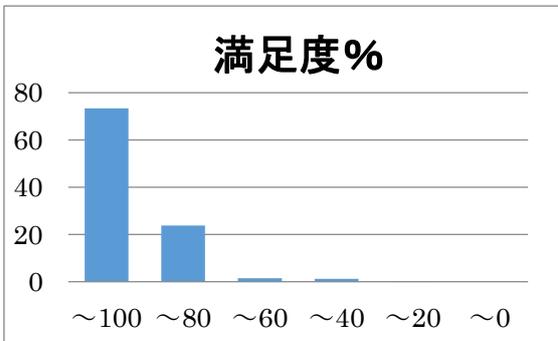
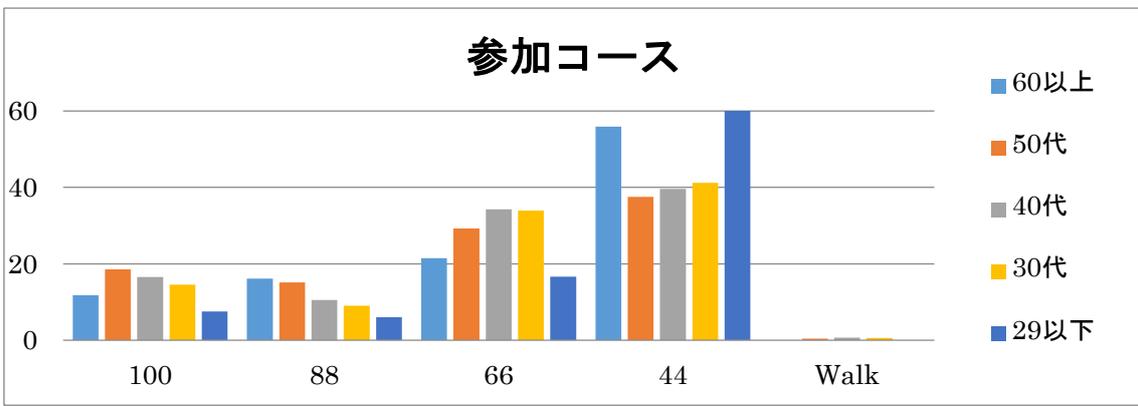
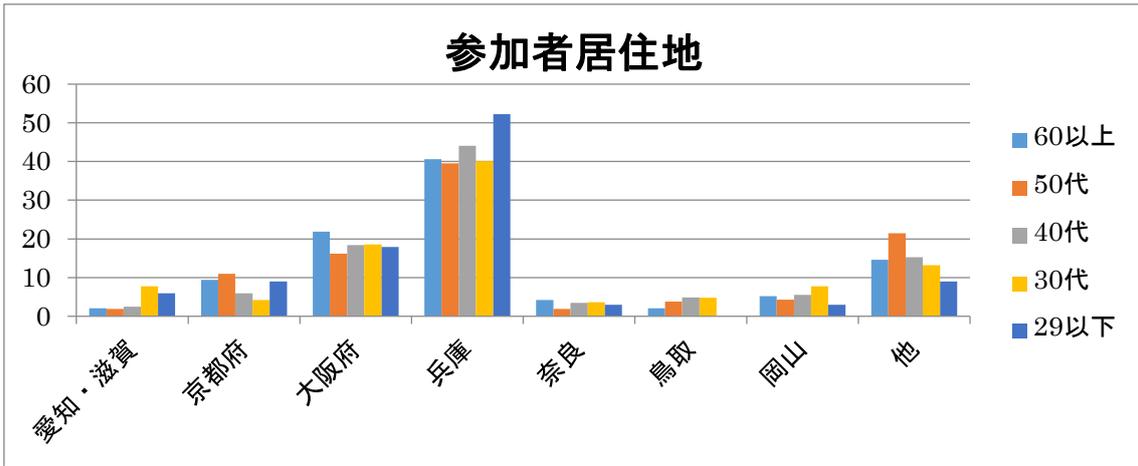
2-2 村岡ダブルフルウルトラランニングアンケート集計結果

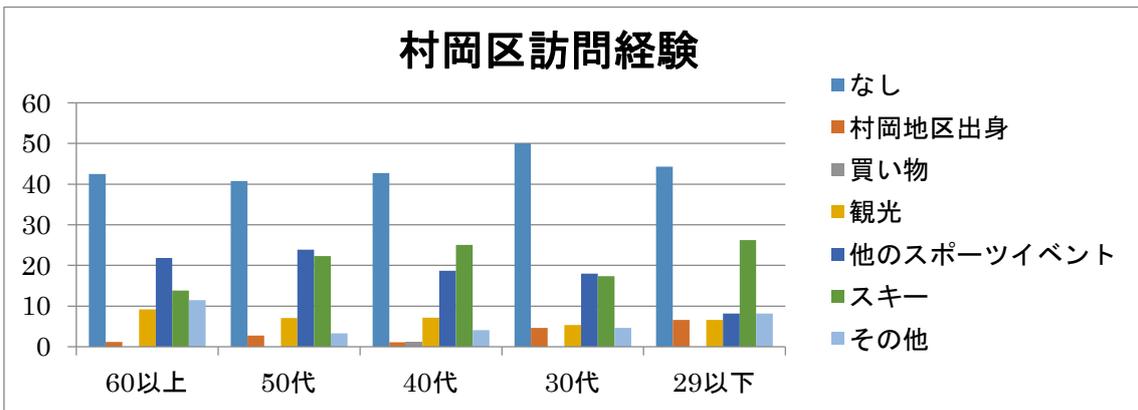
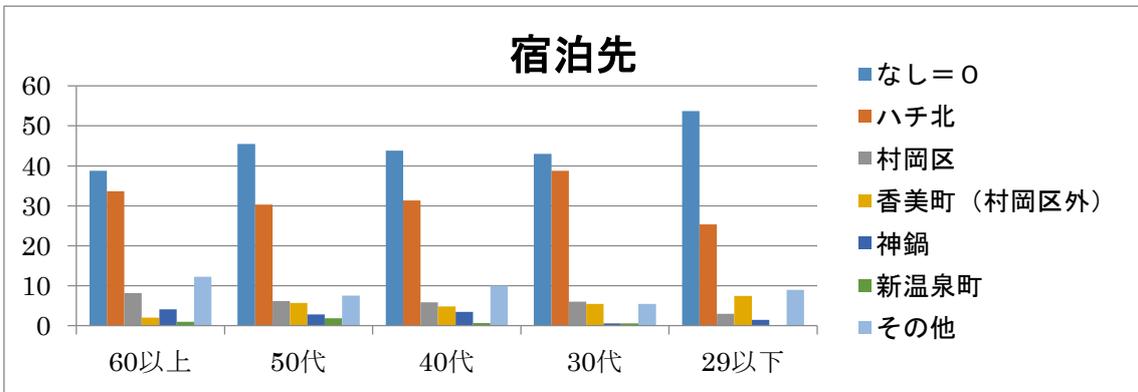
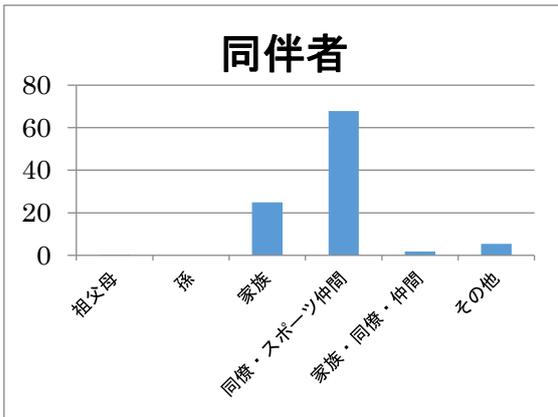
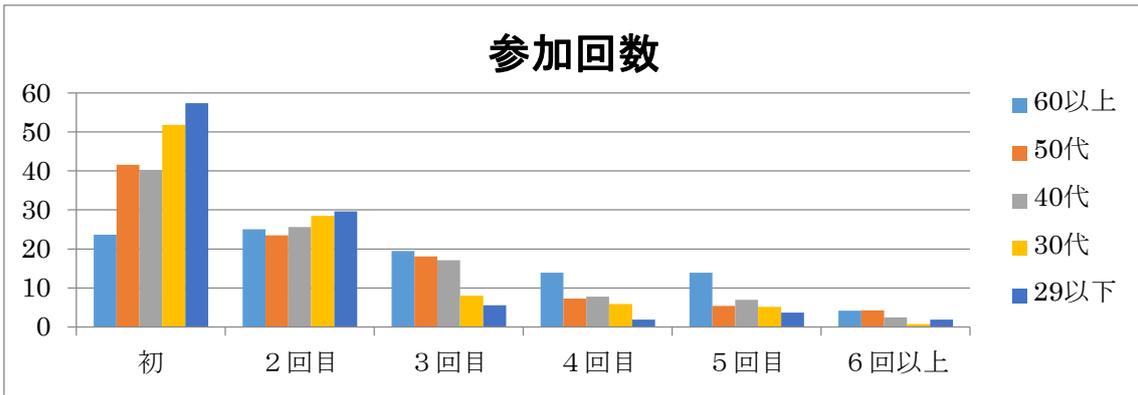
参加者男女比

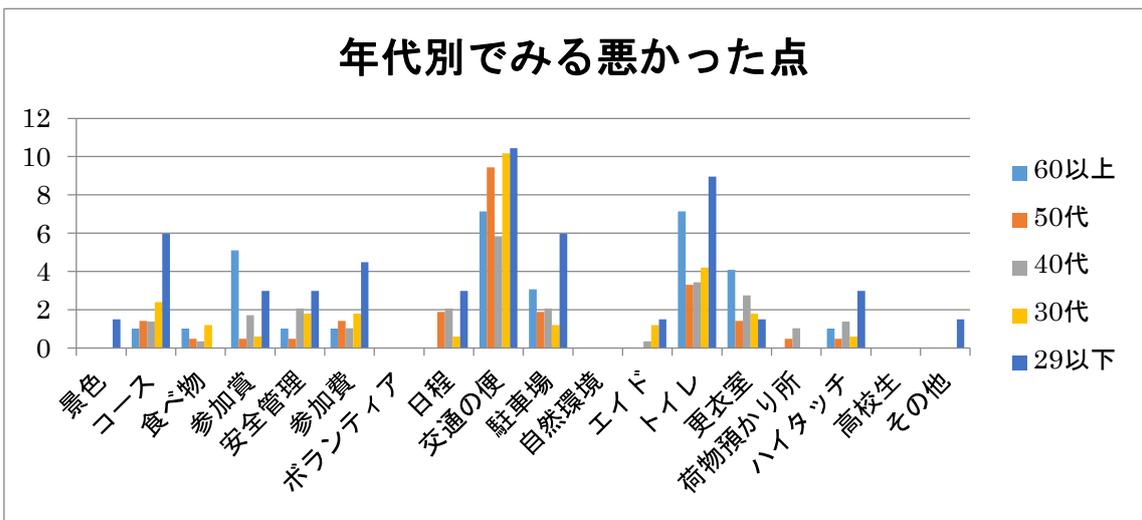
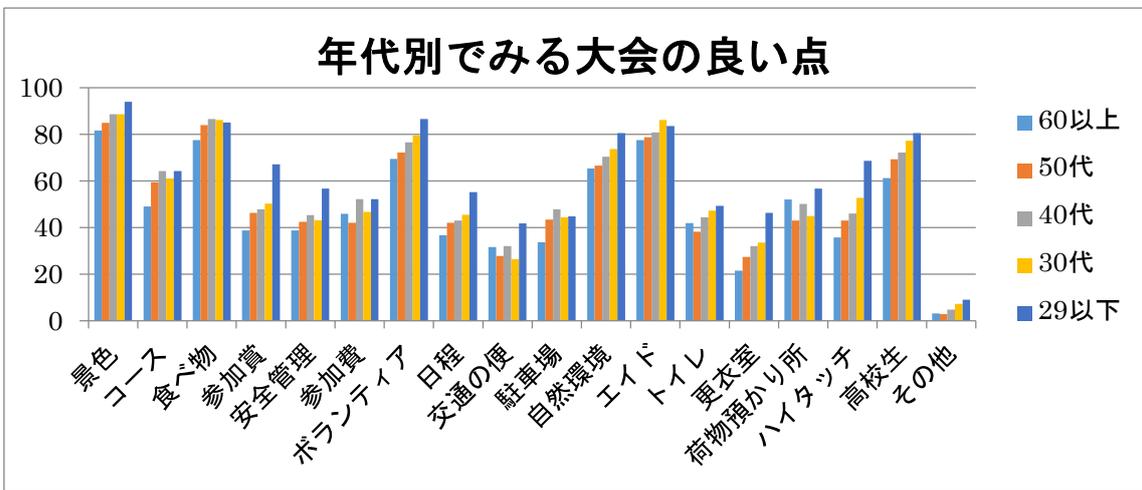
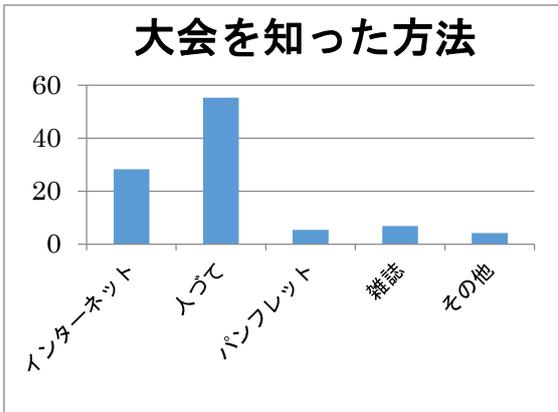


参加者年齢









≪資料3. みかた残酷マラソン提言書≫

2014(平成26)年5月21日

みかた残酷マラソン実行委員会 様

兵庫県立村岡高等学校
地域創造類型

みかた残酷マラソン提言書

村岡高校地域創造類型(第53期生)では地域探求の授業の中で地域のスポーツイベントの調査を昨年より行ってきました。みかた残酷マラソンでは、ランナーへのアンケート調査、ボランティアスタッフへの聞き取り調査、全校生のスタッフ参加等に取り組みました。その結果を分析し、以下のようにまとめましたのでご報告します。

≪コンセプト≫

- (1) 地域から愛される大会
- (2) ランナーもスタッフも楽しめる大会運営
- (3) 女性・若者の参加者を増やすとくみ
- (4) 同伴者へのおもてなし

≪高校生企画≫

*今年度実施を計画している企画

- (1) スタート応援

今年度もスタートから約200m地点で吹奏楽演奏→ハイタッチ→民謡集団蘇武演舞と連続して応援を行う。

- (2) コミュニケーション広場の新設

【提案理由】

アンケート記述の中に同伴者やランナーが走った後での交流の場がほしいとの要望があった。また、昨年高校生として参加して、地域の特産品や地域のアピールが少ないと感じた。

【企画内容】

- ① ゴール会場の砂場前付近に休憩所を設置し、交流の場とする。
⇒現在設置している「疲労回復」のテント付近に椅子50脚(高校のもの)を並べ、ドリンクとアイツグ用の氷を準備し、おもてなしを行う。
- ② 伝言板(メッセージ寄せ書き)を3枚程度設置し、自由に書いてもらう。
できたものをHPなどで紹介する。
- ③ 地元パンフレットを置き、それをういてにコミュニケーションを図る。
- ④ 聞き取り調査・アンケートを実施し、コミュニケーションを図ると同時に来年度以降の改善に役立てる。

- (3) 高校生臨時給水所

【提案理由】

コースの難所を思われる上り坂（忠宮～貫田間の2.5km 区間）に給水所がなく、参加している高校生ランナーからも提案があった。

【企画内容】

- ①今年度は第6 給水所（忠宮）と第7 給水所（貫田）の中間地点に高校生の給水所（ドリンクのみ）を小代区内のPTA 会員の協力いただいて設置する。
- ②名指し応援隊を組織し、応援を行う。（通過するランナーを出場者リストと照合し、氏名を呼んで応援する。）
- ③写真撮影サービスを行う。
- ④民謡集団蘇武による演舞を行う。

* 来年度以降の検討課題としている企画

（4）サポートランナー

【提案理由】

アンケートの安全管理への「良かった点」の評価が低く、記述の中にも安全性の改善要望があった。

【高校生企画】

高校生が救急グッズ・給水等を携行し、難所区間においてランナーをサポートするように走る。

（5）高校生屋台

【提案理由】

地元の特産品などを活用し高校生が商品開発を行い、特に若年女性ランナーが少ない現状を改善するため、スイーツ等を中心に提供する。

【企画内容】

- ①とち味ソフトクリーム（あんこ入り） ②スイーツ
- ③山菜カレー ④鹿肉ステーキ etc.

《実行委員会への提案》

（1）トイレの工夫

【提案理由】

アンケートの中にトイレに関する不満（トイレの数や女性専用等）が多くあり、改善の必要性を感じた。

【提案内容】

- ①男性・女性の優先トイレ設置
- ②トイレ案内放送（時間差をつくりため）
- ③ポスター掲示でわかりやすくする。
- ④トイレに花を飾る

（2）同伴者のおもてなし

【提案理由】

来ていただいた方々に地元の良さをアピールしたり、最高のおもてなしをする。

【提案内容】

①観光地めぐり企画

地元の名勝（うへ山の棚田など）に案内する。高校生ガイドをつけ、案内説明を行う。可能なら、ランナーの応援も行う。

②ステージの企画運営・・・「おまつり広場」づくり

*ビンゴゲーム *地元文化団体＋民謡集団蘇武

*オジレンジャーGEO、おーたん・むーたん登場 etc.

③ライブ映像をゴール会場で流す。

(3) 会場・給水所

①給水所にコーラを置く。⇒アンケート記述の中に要望として多く挙げられていた。

②足冷泉の設置（アイシングを兼ねる）⇒おもてなしの一環

③防犯ブザーの貸し出し（獣対策）

(4) 広報・企画関係

【提案理由】

29才以下の男女の参加が少ない。鳥取県からの参加者が20名程度で隣県なのに少ない。宣伝活動の改善が必要である。

【提案内容】

①HPの更新をまめに行い、1年中見られるようにする。

②大学のサークル等に案内を送る。（若者参加）

③女性限定の参加賞を新設する。

④団体割引（団体参加者が多く、さらに増やしていくため）

⑤ツアーを企画する

⇒（例）旅行社と連携して羽田発鳥取便を活用したマリン旅行パックを企画し、関東（東京）方面の参加者を増やす。

(5) その他

①パンフレットを廃止しハガキで対応する。⇒経費節減

②スキー場のリフト券を特典として付け、冬季来訪者を増やす。

スポーツイベントを通しての地域活性化

発行日 2015年3月20日

発行 鳥取大学地域学部
兵庫県立村岡高等学校

協力 香美町地域おこし協力隊